

# 芳香漂う

(昭和四十二年第六十回記念祭歌)

稲田雅久君 作歌  
名田正信君 作曲

一

芳香漂うやわらかの  
露の春の夕間暮  
朧にかかる夕月に  
浮かぶ辛夷の花吹雪  
ああ鳴り止みて聞えこぬ  
色壮麗の鐘の音は  
六十路の夏に鳴らざるや  
いま黄昏の自治の庭

二

細き羽音も秘そやか  
蜉蝣闇をかすめゆき  
奔る流れの音もなく  
まつよい草の星あかり  
ああ死に絶えて泳ぎこぬ  
銀鱗おどる紅鮭は  
六十路の秋に溯らずや  
いま宵闇の自治の川

三

風に棚引く軽やかな  
雲蒼空の朝ぼらけ  
よぎる秋津の影紅く  
残んの月は薄れゆく  
ああ舞い去りて渡りこぬ  
長の旅寝の雁は  
六十路の冬に還らずや  
いま有明の自治の原

四

軒に麗なる銀の  
垂氷に映る灯に  
星影凍みる松が枝を  
散るひとひらの雪の花  
ああ枯れ果てて萌しこぬ  
野も狭に埋もる花の実  
六十路の春に咲かざるや  
いま夜も更けぬ自治の舎

五

露に滴りぬ生々  
榆林にねむる夢醒めて  
牧場におどる朝もやの  
さなかに歌う夜明の鳥  
見よ紅の山の端に  
湧き立つ空の群雲を  
つらぬきわたる光かな  
いま六十歳の夜は明けぬ

六

寮友の顔に篝火の  
炎もわらう記念祭  
歌をうたわば玉響の  
憂さも舞い飛ぶ火の粉なり  
いざ高らかに祭歌  
はやる太鼓の轟きは  
夜空を深く駆け抜けて  
北斗に和する生命なり